スタートカリキュラム実践ガイド

令和６年３月改訂

横浜市こども青少年局　横浜市教育委員会事務局

目次

１　はじめに～スタートカリキュラムを見つめ直しませんか～

２　スタートカリキュラムを知ろう

３　スタートカリキュラムの見通しをもとう

４　スタートカリキュラムを改善しよう

５　スタートカリキュラム Q&A

６　これまでのスタートカリキュラムの実践から

Ⅰ　はじめに～スタートカリキュラムを見つめ直しませんか～

横浜市では、平成24年3月に全国に先駆けて「横浜版接続期カリキュラム」を策定し、幼保小連携の取組を推進してきました。各学校のカリキュラム・マネジメントにより、市内小学校でのスタートカリキュラム実施率は100%となっています。

令和4年度より、「幼保小の架け橋プログラム」（文部科学省）が始まり、あらためて「スタートカリキュラム」の重要性が高まっています。そこで、今、横浜市のスタートカリキュラムのよりどころとなっている「横浜版接続期カリキュラム平成29年度版　育ちと学びをつなぐ」と、これまでの各地区での研究成果を踏まえて、スタートカリキュラム実践ガイドを改訂しました。

今後のスタートカリキュラムの計画・実施・評価・改善にご活用ください。

市内の幼保小連携推進地区・カリキュラム研究推進地区の取組から

スタートカリキュラムが充実すると・・・

◆子どもが安心して学校生活を始められます。

◆子どもの安心は保護者の安心につながります。

◆主体的に学びに向かう力が育まれます。

◆教職員のカリキュラム・マネジメント力が向上します。

安心して学校生活を始められる
「なかよしタイム」

学校への興味・関心を学習につなげていく「わくわくタイム」

対話的な学びが生まれる「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」

子ども達の主体的な活動の中から、子どもの資質・能力の発揮をみとる対話。
全職員でのスタートカリキュラムの計画。

2　スタートカリキュラムを知ろう

(1) スタートカリキュラムとは

幼児期に遊びを通して育まれた力を生かして、教科等の学習に円滑に接続するための小学校入学当初のカリキュラムのことです。実施にあたっては、生活科を中心として合科的・関連的な指導を行うことや、弾力的な時間設定を行うことなどが学習指導要領総則に規定されています。

(2) スタートカリキュラムのねらい

①子どもが安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己発揮できるようにする。

②子どもが学級の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようにする。

③子どもが幼児期に身に付けた力を発揮して各教科等の学習に円滑に移行し、主体的に学ぶことができるようにする。

(3) スタートカリキュラムを構成する時間（枠組み）（「横浜版接続期カリキュラム 平成29年度版」より）

なかよしタイム	一人ひとりが安心感をもち、担任や友だちに慣れ、新しい人間関係を築いていく時間です。自分の居場所を見いだし、徐々に集団の一員としての所属意識をもち、学校生活の基盤である学級で、安心して自己発揮できるように工夫していきます。
わくわくタイム	幼児期に身に付けた力を発揮し、主体的な学びをつくっていく時間です。生活科を中心として、様々な教科等と合科・関連を図り、教科等の学習に円滑に移行していくための時間として位置付けています。幼児期における「遊びを通した総合的な学び」を生かし、子どもの思いや願いに沿った学習や、具体的な活動や体験をきっかけにして各教科等につなげる学習を大切にすることで、主体的に学ぶ意欲を高めます。
ぐんぐんタイム	「わくわくタイム」や「なかよしタイム」、日常の生活の中で子どもが示した興味や関心をきっかけに、教科等の学習へ徐々に移行し、教科等特有の学び方や見方・考え方を身に付けていく時間です。

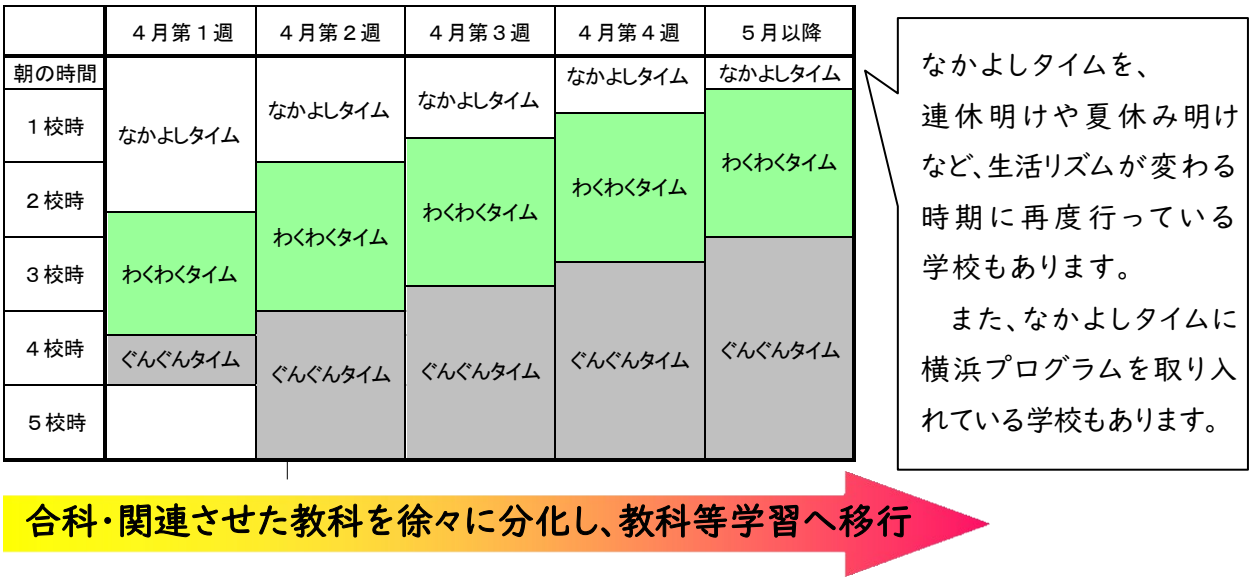
(4) スタートカリキュラム実施のイメージ（保護者向けリーフレット「安心して入学を迎えるために」より）

(5) スタートカリキュラムの実施時期

学習指導要領では入学当初のカリキュラムとされていますが、横浜市では、入学当初から夏休み前頃までとしています。これは、環境変化の大きい時期を長い目で捉えて、子どもの育ちと学びを支えていくという趣旨であり、なかよしタイムを7月までやり続けるということではありません。

多くの推進地区では、4月の1週目、2週目となかよしタイムの時間を徐々に減らしていき、連休前には通常の時間割で実施しています。一方で、わくわくタイム、ぐんぐんタイムは5月以降も続き、合科的・関連的な指導を積極的に取り入れることで、教科等の学習に円滑に接続させています。

この時期は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる「架け橋期」（5歳児から小学校1年生の2年間）の核となる時期です。



（6）合科的･関連的な指導

合科的･関連的な指導については『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』（文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター平成30年4月）に具体的な考え方が記載されています。

	捉え方	タイプ（例）	
合科的な指導	各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで，単元又は1コマの時間の中で，複数の教科の目標や内容を組み合わせて，学習活動を展開するもの	【合科】 生活科を中心とした単元の学習活動において，複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開することで，指導の効果を高める	生活科 他教科
関連的な指導	教科等別に指導するに当たって，各教科等の指導内容の関連を検討し，指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの	【関連 A】 生活科の学習成果を他教科等の学習に生かす	生活科 他教科等
		【関連 B】 他教科等の学習成果を生活科の学習に生かす	生活科 他教科等

合科の例として、学校探検に行くために、図工でのワッペン作りで「生活を楽しくしたり伝え合ったりするものの用途などを考えながら、思いのままに表す」の指導をすることなどが考えられます。

関連的な指導の例として、生活科で春の季節を感じたり花を育てたりする学習が、音楽科での音楽づくりで、「発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために、設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能」を高めることにつながることや、国語で身に付けた資質･能力「相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること」が、学校探検での自分の経験や気付きを伝えるときに発揮されるよう関連を意識して指導することなどが考えられます。

3　スタートカリキュラムの見通しをもとう

スタートカリキュラム実施までの主な流れ

～3月

▼

（1）　自校のスタートカリキュラムの状況を知ろう

▼

（2）　就学する園の子どもたちの様子を知ろう

▼

（3）３スタートカリキュラムの実施計画を立てよう

▼

（4）　実施計画を全職員で共通理解しよう

▼

4月

▼

（5）　スタートカリキュラムを実施しよう

▼

5月

▼

（6）　振り返りをしよう

▼

3 月以前

(1) 自校のスタートカリキュラムの状況を知ろう

・今年度（昨年度）の実施状況を把握し、成果と課題を明らかにしましょう。

(2) 就学する園の子どもたちの様子や、園の工夫を知ろう。

・園の先生と顔の見える関係をつくり、子どもの育ちと学びの様子を引き継ぎましょう。

・5歳児の後半で子ども達が夢中になった活動や、その際に有効だった手立てなどを共有すると、4月からの子ども達への支援に役立てることができます。

・特に、支援や配慮の必要な子どもについては「子どものよさを伸ばす」という視点で丁寧に引継ぎを行い、支援をつないだり学校としてできる限りの受入態勢を整えたりしましょう。

・保護者から事前の相談があれば丁寧に対応し、信頼関係を入学前から築いていきましょう。

・児童支援専任教諭を中心に園を事前訪問し、入学予定の子どもたちと一緒に遊んだり、園での生活を体験させてもらったりする学校もあります。

・園から送られてくる要録から、子どもの育ちや得意なこと、好きなことなどを把握しましょう。

(3)スタートカリキュラムの実施計画を立てよう

・実施期間

4月の1週目、2週目と「なかよしタイム」を徐々に減らし、連休前には通常の時間割で実施する学校が多いようです。一方で「、わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」では 4月から6月頃までかけて「学校探検」「春となかよし」など生活科の単元を中心として、合科的･関連的な指導を積極的に取り入れることで、教科等の学習に円滑に接続させています。

・実施体制

学年だけでなく、児童支援専任教諭、養護教諭、専科教諭、管理職、地域、ボランティア等も含めて、入学当初の一定期間1年生に集中して関わることが、スタートカリキュラムを効果的に進めていく鍵になります。

・実施計画

学級の年間指導計画（学級暦）を見通して、生活科を中心として合科的・関連的な指導が図れる教科等を選択します。

・週案のひな型（例）は横浜市こども青少年局保育・教育支援課「接続期カリキュラム情報」からダウンロードできます。

(4)実施計画を全職員で共通理解しよう

・職員会議等で、実施計画の概要を伝え、入学当初の実施体制等について共通理解を図ります。

4 月～

(5)スタートカリキュラムを実施しよう

・週案で計画を立て、「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」のねらいを実現できるようにします。

・年度当初は短時間でも毎日担任間でその日の振り返りをし、明日以降の見通しをもちましょう。

・子どもの実態にあわせて計画を柔軟に変更させましょう。

・配慮を必要とする子どもの指導や支援について、共通理解しましょう。

5 月以降

(6) 振り返りをしよう

・スタートカリキュラムが終了したら早めに今年度の振り返りをし、次年度に生かしましょう。

スタートカリキュラムの実施・改善の参考となる資料

1「横浜版接続期カリキュラム 平成 29 年度版 育ちと学びをつなぐ」

横浜市こども青少年局 横浜市教育委員会（平成 30 年3月発行）各校に配付

2「横浜市幼保小連携推進地区・接続期カリキュラム研究推進地区報告」

各年度の成果報告書は、横浜市こども青少年局保育・教育支援課のホームページに掲載

3「横浜市立学校カリキュラム・マネジメント要領」総則、各教科等編

横浜市教育委員会（平成 30 年 8 月発行）

4「発達や学びをつなぐ　スタートカリキュラム」スタートカリキュラム導入・実践の手引き 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成 30 年4月発行）

5「スタートカリキュラムスタートブック」

文部科学省国立教育政策研究所（平成 27 年 1 月発行）各校に配付

4, 5の資料は、文部科学省のホームページよりダウンロード可

4　スタートカリキュラムを改善しよう

学校で実施しているスタートカリキュラムを改善していくことで、幼児期の子どもの育ちと学びをつなぎ、小学校等の横断的に育成を目指す資質・能力の育成につなげることが大切です。また、保育・幼児教育施設の職員と共有したり、初めて１年生を担任する先生が工夫したりできるよう、指導計画や年間計画、週案等の形で、学校のカリキュラムとして資料化し、学校の全職員で共通理解をしておくことが大切です。

以下は、作成例ですので、内容は各校で工夫してください。

入学前の子どもの学びや姿について想像したり、情報収集したりする。

（園を訪問した同僚の声から。
指導要録から。保護者との対話から。）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について把握する。

令和3年度の市内向け調査では、近隣の園や連携先の園と、「10の姿」を理解・共有する機会を設定している小学校は13校です。

（2）期待する子どもの姿を共有する

スタートカリキュラムを通して子どもが身に付けてほしいことを共有する。

（例）
- 安心感（分かる。できる。楽しい）
- 新しい人間関係を築こうとする意欲
- 主体的に学ぼうとする態度
- 聞く力。表現する力。友だちと一緒に活動する力
- 4月～5月までの学習内容

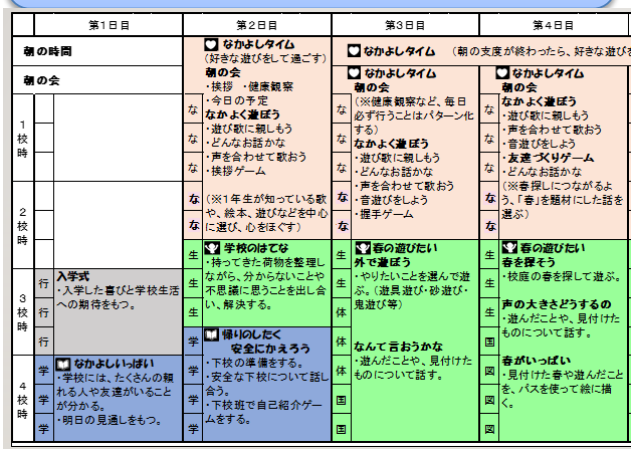
（3）スタートカリキュラムをデザインする

〈単元を構成する〉
・生活科を中心とする
・単元配列表を作成する
・合科的、関連的指導を計画する

【図工】「『自分のマーク』で」「自分のマーク」を作り、紹介し合って楽しむ。	【国語】「声のおおきさどうするの」声の大きさを変え、場に合った声の大きさで話す。	【道徳】「みんなが使うもの」公共物の使い方には、いろいろなきまりがあることやそのきまりがあるわけを考える。
【国語】「どうぞよろしく」自己紹介をする名刺を作る。	生活科「がっこうだいすき　わくわくたんけんたい」学校探検をして気付いたことを伝え合い、学校の様子やそこでかかわる人々のことが分かり、楽しく安心して生活する。	【国語】「ほんはともだち」低学年向けの様々な本を読んで、本と親しむ。
【特別活動】「気持ちのよい学校生活を送ろう」教室や施設の場所や使い方を知る。	【算数】「なかまづくりとかず」学校の人や物を使った数調べをする。	【音楽】「こえをあわせてうたおう」校歌やいろいろな歌を友達と楽しく歌う。

（例）
- **生活科と他教科等間の資質・能力のつながりを構想する。（左上）**

〈週案に位置付ける〉
・週の計画と時間配分
・弾力的な時間割



- **朝の会から1時間目を連続した時間とし、園で親しんできた遊びや活動を取り入れる。（右上）**
- **ゆったりとした時間の中で活動を進めていかれるよう、2時間続きで設定する。**
- **5時間目を遊び込みタイムとして、主体的に探究する時間を確保する。**

（1）幼児期の学びを理解し、（2）期待する子どもの姿を職員間で共有します。その上で、（3）計画や実施をデザインします。市内の小学校では、計画時に園の先生と協働したり、保育士が朝の会（**なかよし**タイム）に実際に参加したりする工夫をしている小学校もあります。また、空きスペースの活用や、遊びのアイデアの出し合い等、全職員で計画・実施をしている学校も見られています。

（4）スタートカリキュラム編成の留意点

・幼児期に身に付けた力を把握し、教科等の学びでその力を発揮できるようにします。

そのためには、近隣の園を訪問し、園でのカリキュラムや生活の流れ、指導の実際を知りカリキュラム編成の参考にします。また、近隣の園の保育士・教諭と合同研究会をもち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有したり、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムとのつながりを考えたりします。職員同士が信頼関係をつくり、互いの子ども観を共有しながら、連続性・一貫性をもったカリキュラムを編成します。

・生活科を中心とした合科的・関連的な指導を工夫します（わくわくタイム～ぐんぐんタイム）。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、生活科を中心として他教科等と合科的・関連的な指導を行ったり、子どもの生活とつながる学習活動を取り入れたりして、教科等の学習に徐々に移行していきます。

・生活に即した学びを構成します。

この時期の子どもは、生活が丸ごと学習環境になります。生活の中から生まれる興味・関心や思い・願いをきっかけにすることで、子どもたちは主体的に活動を展開していきます。教師が一方的に選び与える活動ではなく、子どもたちのつぶやきや興味・関心から活動を立ち上げることが大切です。

・弾力的に時間割を設定します。

入学当初の子どもの発達特性に配慮し、15 分程度の短い活動を設定したり、子どもが自らの思いや願いに基づいてじっくりと活動するために 60 分～90 分の時間を確保したりするなど、弾力的に運用します。時間割に子どもを合わせるのではなく、子どもの実態に合わせて時間割を柔軟に組み替えていきます。

また、幼児期の生活リズムや一日の過ごし方にも配慮します。例えば、朝の会から1時間目を連続した時間として設定し、幼児期に親しんできた手遊びや歌、リズムに乗って体を動かすことや絵本の読み聞かせなどを行うことは、小学校生活への段差を低くし、安心して楽しい気持ちで一日をスタートすることにつながります。

※週案作成例

		第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目
朝の時間			なかよしタイム（好きな遊びをして過ごす）	なかよしタイム（朝の支度が終わったら、好きな遊びをして過ごす）		
朝の会			朝の会 ・挨拶　・健康観察	なかよしタイム 朝の会	なかよしタイム 朝の会	なかよしタイム 朝の会
1校時			な ・今日の予定 なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう な ・どんなお話かな な ・声を合わせて歌おう ・挨拶ゲーム	な（※健康観察など、毎日必ず行うことはパターン化する） なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう な ・どんなお話かな な ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう ・握手ゲーム	な なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう ・声を合わせて歌おう な ・音遊びをしよう ・友達づくりゲーム な ・どんなお話かな	な なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう な ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう 音 ・わらべうたに親しもう ・どんなお話かな
2校時			国 （※1年生が知っている歌や、絵本、遊びなどを中心に選び、心をほぐす） 音	国 音	国 （※春探しにつながるよう、「春」を題材にした話を選ぶ） 音	音 （※「春」を題材にした話や、生き物とのふれあいにつながるような話を選ぶ） 国
3校時	行 行 行	入学式 ・入学した喜びと学校生活への期待をもつ。	生 学校のはてな 生 ・持ってきた荷物を整理しながら、分からないことや不思議に思うことを出し合い、解決する。 生	生 春の遊びたい 外で遊ぼう 生 ・やりたいことを選んで遊ぶ。（遊具遊び・砂遊び・鬼遊び等） 体	生 春の遊びたい 春を探そう 生 ・校庭の春を探して遊ぶ。 生 なんていおうかな ・遊んだことや、見付けたものについて話す。	生 春の遊びたい 春を探そう 生 ・春を探して遊ぶ。 ・学校で飼育している動物とふれあう。 生 カードにかこう ・遊んだことや、見付けたものについて、カードにかく。（「鉛筆つまんで」「足はぺったん」）
4校時	学 学 学	なかよしいっぱい ・学校には、たくさんの頼れる人や友達がいることが分かる。 ・明日の見通しをもつ。	学 帰りのしたく 安全にかえろう 学 ・下校の準備をする。 学 ・安全な下校について話し合う。 学 ・下校班で自己紹介ゲームをする。	体 体 国 国 なんていおうかな ・遊んだことや、見付けたものについて話す。	国 図 春がいっぱい ・見付けた春や遊んだことを、パスを使って絵に描く。 図 図	国 国 なんていおうかな 国

※週案の様式データは保育・教育支援課ホームページに掲載しています。

5　スタートカリキュラムQ&A

Q スタートカリキュラムの時間数の取り方がよくわからないのですが

「なかよしタイム」は、教科等のねらいを達成できる内容であれば国語、音楽、特活などで取ることもできます。その際、弾力的な時間運用を行い15分単位で実施していくこともできます。また、1年生は年間の授業時数が34週で計画されていることから無理のない範囲で余剰の時間を充てることも可能です。

「わくわくタイム」は、生活科を中心として様々な教科等と合科・関連を図り、各教科等に適切に時間数を割り振ります。

Q 「なかよしタイム」に時間を割くと教科の時間が足りなくなってしまうのですが

「なかよしタイム」は、登校後の時間・朝の会・休み時間等も幅広く活用することで、そのねらいを達成できるようにします。また、「ぐんぐんタイム」の国語や算数の時間の導入に、「なかよしタイム」で慣れ親しんでいる遊びや絵本の読み聞かせなどを取り込むことで、教科の目標となかよしタイムのねらいを同時に達成していくことができます。

Q スタートカリキュラムを子どもの実態に合った内容にしていくにはどうしたらよいでしょうか

まずは、近隣園を訪問し、保育士・教諭に話を聞くなどして、園のカリキュラムや生活の流れ、指導の実際を知り、スタートカリキュラムに生かしていくことが大切です。保育者から絵本の読み聞かせや手遊びの仕方を学んだり、園で流行している遊びを取り入れたりする学校も増えています。

Q 職員の共通理解を図り、誰にでもできるようにするためにはどうしたらよいでしょうか

学校としてスタートカリキュラムを作成し、入学当初の職員の関わりや、実施期間、方針等を明確にしておくことが大切です。また、職員会議等で周知し、全職員で1年生を迎える意識をもちましょう。

Q スタートカリキュラム実施時の人の配置はどうしたらよいでしょうか

学年だけでなく、児童支援専任、養護教諭、専科教員、管理職、ボランティア等も含めて、入学当初の一定期間1年生に集中して関わることで、子どもの安心が増します。

多面的に子どもを見ることで、配慮や支援の必要な子どもたちの実態が把握しやすくなり、その後の指導や支援につなげることができます。

Q 子どもたちは早く教科書を使った勉強をしたいと思っているのですが

子どもたちは、計算や音読、書字などの学習に憧れをもっています。家庭や園などで、すでに文字の読み書き等を習っている子どもも少なくありません。一方で、小学校に入学して初めて文字の読み書き等に出合う子どももいることから、実態を見ながらバランスよく学習を進めていきます。なかよしタイムの活動に文字や数字など、学習につながる要素を取り入れることも有効です。

5　これまでのスタートカリキュラムの実践から

成果１　「子どもの安心」

入学直後に、次のような活動や環境設定をすることで、安心して学校生活を始められます。

園での経験を生かす

・園で行っていた手遊び歌などを行うことで、**安心して**楽しく友だちとふれ合っていた。

　人数を変えて行うことで、いろいろな友だちとふれ合う機会が増え、活動をきっかけに友だちが増えて喜ぶ子どもの姿が見られた。

グループ机

・伝で慣れ親しんだグループ机により、子どもの安心につながった。

・ 生活班でグループ机にして互いに顔が見えるようにすることで、初めて会う友だちとも自然と話をするようになり**関わりが広がった**。不安そうな顔を見せていた児童が、まずグループの友だちと仲良くなり、人間関係を築いていくのに役立った。

ルーティン化・見える化

・なかよしタイムでは
①朝の支度・自由遊び
（お絵かき・ぬり絵等）
②あいさつ　③ダンス
④健康観察・今日の予定
⑤うた・ゲーム
⑥読み聞かせ　などルーティン化することで**生活のリズムができ**、安心して過ごせるように心がけた。「朝の支度」や「今日の予定」を絵カードや時計の模型で示すことで「いつ」「何を」するのか**児童が見通しをもって取り組めるようになった。**

朝の自由タイムの設定（登校後～朝の会）

・ 登校してから一人ひとりのペースで学習の準備ができ、ゆとりをもって朝の支度をすることができた。

・ 自分で遊びを選択したり、何もしないでのんびり過ごしたりすることで、**初めて会う友だちと自然な関わりがもてるようになった。**

・ ゆったりした時間を取ることで、おしゃべりをしながら粘土で遊んだり登校班の友だちと関わったりすることができた。

主体的な活動を保障

・「なかよしタイム」で、子どもたちの思いからみんなで遊びを**選択していく**ようにしたところ、生き生きと活動する姿があった。

・朝の自由タイムにカプラコーナーを追加した。子どもが遊びを**自己決定**し、自由に遊ぶ中で、自然と友だちとの**会話が広がったり**、**協働して**遊びをつくったりする姿が見られた。「なかよしタイム」の遊びでは、できる限り、子どもたちの思いからみんなで遊ぶ遊びを決定していくようにしたところ、**生き生きと活動する**姿があった。

学年全体で活動

・登校してから朝の会が始まるまでの時間、クラス関係なく遊ぶことで、リラックスした雰囲気で一日をスタートさせることができた。

・クラスが分かれてしまった幼稚園・保育園の友だちや、登下校の班が同じ友だちと顔を合わせ、**安心して**活動することができた。

成果２　「保護者の安心」

入学前からスタートカリキュラムのねらいや活動、期間等を保護者に伝えておくと、保護者の不安の軽減に役立ちます。入学のしおりでスタートカリキュラムの内容を紹介している学校もあります。

学校からの発信	子どもの姿から
・入学説明会や入学前保護者面談において、スタートカリキュラム（特に「なかよしタイム」）のねらいや活動を聞いた保護者は「入学後の**不安が減った**」と言っている。 ・スタートカリキュラムの内容を教師が保護者に説明することで、**保護者の安心**につながった。また、学年共通のカリキュラムで実施していることも保護者の安心につながっている。	・子どもたちが「なかよしタイム」で多くの友だちと関わり、ゲームや歌、読み聞かせ等の活動をしてきたことで、学校生活を楽しく送っている様子が保護者にも伝わり、家庭訪問や懇談会等で、「安心した」という声をいただいた。

成果３　「子ども理解と職員連携の促進」

学年全体の活動に多くの教職員が関わることで、多面的に子どもを見取り、適切に支援することができるようになります。また外部人材との連携も促進されます。

・他のクラスの子どもたちのことも知ることができ、学年の中で役割を分けて指導をすることがしやすくなった。また、お互いの指導の仕方（話し方、声のかけ方など）を見合い、どのように声をかけていくのか、どの点について重点的に指導していくのかなどを共有することができた。
・学年で教室近くのホールに集まって活動した。人間関係を築くのが難しいと感じている子どもも、活動する中で同じ園の友だちとふれ合って安心し、少しずつ新しい友だちとも関わっていこうとしていた。
・スタートカリキュラムを難しいと感じる教師が多かったが、学年で学び合いながら進めたことで、学年としての共通理解を図ることができた。
・専科の先生の協力もあり、多くの教師が関わり、**個に応じた関わりをもつ**こともできた。
・4月から5月にかけては毎日朝と放課後、一日の流れや指導の在り方を確認することで、クラス間で相違が出ないようにし、担任が迷うことなく安心して指導ができるようにした。
・校内協力体制で、2週間級外の教員１名が入り、ゆとりをもって子どもに接することができた。
・保護者や地域の方にボランティアとして朝の時間に関わってもらった。担任だけではなく児童支援専任や専科、ボランティア等の大人が身近にいることで子どもたちは**安心して一日をスタートすること**ができた。
・全職員がねらいを理解し、育てる力を共有し取り組むことで、子どもが学校に慣れ、**自己実現を図るまでの時間が短くなった**という手応えを感じている。そして、職員は、「なかよしタイム」におけるそ**の子のよさを今まで以上に見付けようとしている**。自己発揮を支えることにつながっている。

成果４　「園との連携の促進」

園の保育士・教諭と連携をとることで、子どもの育ちと学びをつなげることができるようになります。

園の保育士・教諭が授業に入る

・ 園の保育士・教諭に読み聞かせをしていただいた。
子どもたちは、楽しい手遊び歌や読み聞かせにより、**ほっとする時間**を過ごすことができた。
１年担任も、**園の手法を学ぶ機会**になり、スタート期の子どもたちへの対応等のヒントとすることができた。園の保育士・教諭とも連携して取り組んでいることで、**保護者の安心感**にもつながっていると感じている。

入学前の園訪問と情報共有

・ 入学前の園訪問（主に児童支援専任）の情報を生かして**丁寧な声かけや支援**ができた。
・ 各幼稚園から送られる「スタートカリキュラム作成用資料」に、就学前の経験また生活技能が詳しく記載されているため、**スタートカリキュラムの作成及び運営にとても有効**であった。
・入学前の手遊びや遊び、会話の仕方について園から学び、**実際に生かしていく**ことができた。

園の保育士・教諭との研修会

・ 園と学校の先生が、短い時間であったが集まって子どもたちの育ちや学びのために共通の認識をもつ時間となったと思う。

小学校の先生たちが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基盤として、育ちや学びをつなげていくために様々な工夫をしていることが分かり良い研修の場だった。

１日保育参観

・ 保育園での遊びを通した生活の中にたくさんの「10の姿」とのつながりを感じることができました。保育計画で保育士が大切にしていることを知り、振り返りも丁寧にされていて、個の見取りの深さを感じました。

成果５　「主体的に学びに向かう力を育む」

生活科を中心としたスタートカリキュラムで、子どもの思いや願いから出発した問題解決的な単元づくりを工夫することで、様々な教科等との合科・関連の必然性が生まれ、主体的に学ぶことへの意欲が高まり、教科学習に円滑に移行することができます。

子どもの興味や関心から出発

・ 校歌に出てくる場所や生き物を学校探検ツアーにつなげたことで、子どもが**生き生きと**活動していた。
・ 絵本の読み聞かせから春見付けにつなげたり、いろいろな先生との出会いから、学校探検につなげたりしたことで、**主体的に取り組む姿**が見られた。
・ 子どもたちの興味関心をもとに、生活科を中心に他の教科との関連を図りながら授業を組み立てた。例えば、１回目の学校探検から、もう少し詳しく知りたいことを話し合い、学校探検パート2を行った。探検を終えた後は、その都度振り返りをしたり、子どもが**自覚的に学びを捉えられる**ように教師が声をかけたりすることで、子どもたちの**学びを深める**ことができた。

・ 学校探検をしたり、学校の身の回りの自然に触れ合ったりすることで、子どもたちの興味・関心を引き出し、次の**活動の意欲を引き出すこと**ができた。

問題解決的な活動を設定

・ 自分で行きたいところ、見たいところをじっくり見られるよう、学校探検の時間を多く取った。その中で、職員室への入り方や、先生への質問の仕方を学び、実際に活用する経験をした。また、棟や教室の名前や役割などいろいろな知識を得ることができた。分からないことは先生に聞いたり、友だちと相談したりして、自分たちで解決することを経験できた。**満足感**を味わえたように思う。

・ 子どもたちの思いから、「学校探検」「ぐんぐんそだて」などの活動を進めていった。自分のやってみたいことが実現できるということで**主体的に学びに向かう姿**が見られた。生活科だけではなく、国語や道徳、算数などとも**関連付けて学習**できたので、子どもたちの**思いが途切れることなく**、友だちと**協同して活動**したり、**熱心に観察**したりしていた。

・ 子どもたち一人ひとりが**「やりたい」という思いをもって**取り組むことができていて、**「学校が楽しい」「学習することが楽しい」**という思いにつながっている。また、続けていく中で**自ら学習課題をもち、学習計画を立てる様子**が見られるようになってきた。

・ 問題が発生したときには担任が全て教えるのではなく、子どもたちでどうしたらよいかを考えられるようにした。どんなに小さくても、できたことや成長したことは大いに褒め、それをクラス全体で共有できるようにした。その**成果は、子どもたちが失敗したときに大きく表れた**と感じる。入学当初は、分からないときに全て担任のもとへ来ていた子どもたちが、少しずつ友だちに聞いて解決したり、まず自分で挑戦しようとしたりする姿が見られるようになった。また、失敗に合わせて掲示物や声かけを変化させ、安心感とやる気をもって活動できるようにした。困ったことがあっても、友だちや先生が助けてくれるという**安心感によって、活発な授業や活動ができる**ようになったのではないかと考えられる。

生活科の学びと他教科等の学びをつなげる（合科・関連）

・ 生活科の学校探検をきっかけに、国語の「なんていおうかな」で場面に応じた挨拶を学んだ後に実際に活用したり、国語の「どうぞよろしく」で自己紹介の名刺を書いて渡したりするなど、**子どもの必要感から教科の関連**を図ったことで、**主体的な姿**が見られ、**生きて働く学び**となった。

・ 生活科を中心に、合科・関連が図れそうな教科を予め把握したりカリキュラムを組むことで、子どもの**必要感や興味・関心に応じた学習を展開**することができた。

・ 4月は、「学校のみんなとなかよくなろう」というめあてをもって、学校探検をした。ペアで自由に探検することで、教室に戻ってきたときに**様々な発見や出会いを話す時間をつくる**ことができた。話す以外にも絵や文章で表すことで友だちや先生に**伝えることを楽しんでいた**。「仲よくなる」ことをめあてに、国語で挨拶や質問の言葉を学習したり、気になる給食室の先生との出会いをきっかけに、特別活動で給食について栄養教諭に話を聞いたりと合科関連を図って指導を行い、主体的な学びを引き出すことができた。

・『横浜版接続期カリキュラム　育ちと学びをつなぐ』の冊子にある事例からいくつか取り上げ、実践した。子どもたちが**強い興味・関心をもって**学習に入ることができるので、学んでいる姿が本当に楽しそうで、取り入れてみて良かったと思う。

上級生や学校内外の大人（職員）と積極的に関わる

・ 生活科で行っていた名刺交換は、休み時間の活動へと発展し、校内のあちこちで、一年生が職員や上級生と関わる姿が見られるようになった。多くの人と名刺交換したいという願いの実現に向けて、解決しなければならない問題に子どもが自然に取り組んでいた。

・ 梅の実を幼稚園や保育園にあげるために技術員さんに取ってもらい、関わりが深まった。

・ 学校探検を中心に上級生との交流、学校を支えてくれている人々との出会いが生まれ、興味・関心が広がった。

スタートカリキュラム実践ガイド

令和6年3月　　発行

発行　横浜市こども青少年局 保育・教育支援課
横浜市教育委員会事務局 教育課程推進室
同　小中学校企画課

編集　横浜市こども青少年局 保育・教育部
保育・教育支援課 幼保小連携担当
〒231-0005横浜市中区本町6丁目50番地の10
TEL：045-671-3731